

## 保育の中の絵本



緑

森

幼児期は本―絵本―と「出会う」時期である。この時期に、良い絵本を与えることによって、子どもが本と「じょうずな出会い」ができれば良いと考えてきた。最近では、絵本もかなり多くの種類、数が出版されている。その内容も良心的なものが増えているのは嬉しいことである。

私の幼稚園の保育室にある図鑑、童話等の絵本は子どもが好きに読んでいるが、その他に母親を対象に絵本等の貸し出しをしている。比較的教育熱心な地区であり、絵本に対する関心もどちらかというと高い方である。しかし昨年度、特に気にかかった傾向として、身体を動かして遊ぶ活動は好きだが、絵本等にあまり興味を示さず、自分から本を読もうとしないことも、絵本の見方をあまり知らず、ただページをめくってすぐに本を変えたがる子ども、絵本の扱い方の乱暴な子ども等が目立ったことである。

毎日の保育の中に、教育要領「言語」の活

動の一部として、おはなし（童話の専門の先生による一週一度、二十〜三十分のもの） 紙芝居、絵本をとり入れてはきたが、年長組の一年間、他の活動と共に、絵本を使用した活動を積極的にもつことを計画し、次のように行なった。

四、五月は主に保育室にある絵本（福音館書店発行、ぐりとぐら、ぐるんぱのようちえん、のろまなろーらー、だるまちゃんとてんぐちゃん、そらいろのたね等）をほとんど毎日帰りの時間の前のひとときに読んで聞かせたり、皆で絵をかいてお話を作って遊んだ。続けて絵本を読んで聞かせていると、今まで、図鑑のような本ばかり見ていた子どもが童話の本を広げたり、あまり絵本を手にした子どもが本を開くようすが見られた。一度読んだ本は翌日から必ず誰かが手にしていた。本の扱い方もだいぶ馴れてきたので六月に入って図書室を利用することにした。

図書室は昨年二月に幼稚園の十五周年記念に完成した。本は以前から廊下等を利用した図書コーナーで貸し出していた。図書室の完成で蔵書もふえ、児童図書は一〇〇冊以上になった。本の選択は

各方面からの推薦書（かつら文庫、良い本のリスト、小学校、新聞、その他）をもとに、図書係の母親と職員が相談した上、実際に調べて購入している。

はじめ図書室に入った時は本がたくさんあるのに驚き、やや緊張気味であった。図書室にどんな本が並んでいるか、保育者とい



“どの本にしようかな”

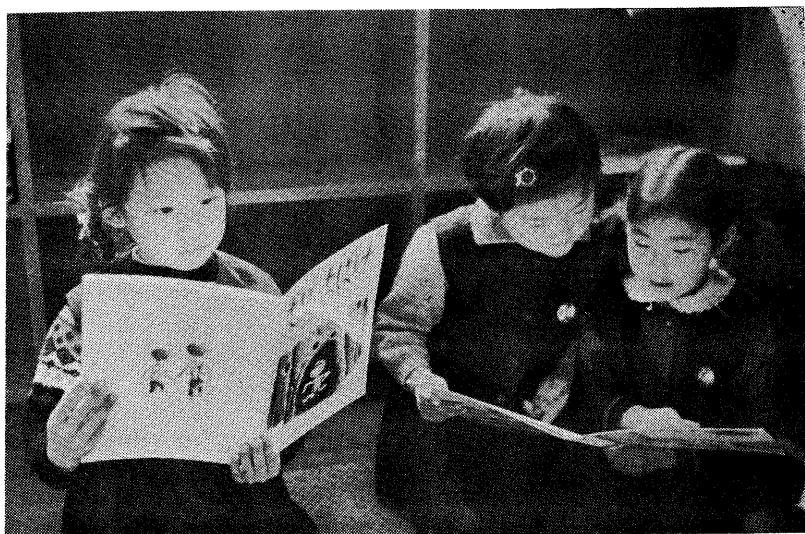


自分の好きな本を読んでいる

っしょに見学した。自分の持っている絵本、あるいは、以前借りたことのある絵本などが出て来ると大喜びであった。第二回目は、本を読む前に手を洗う、本のページをめくる時折らない…など、本の扱い方を中心という具合に、一学期は絵本、図書室に親しむようにした。また利用した日は、図書室の中で絵本を読んでも聞かせたが、それがまた楽しみでもあったようだ。

二学期は、運動会、展示会等の行事が一段落した十一月、再び図書室を利用した。今回は子ども自身がだいたい積極的になり、本の選択も結構考えているようだった。選ぶ理由は、「先生が読んでくれたから」「ママが借りてきてくれたことがある」「この本好きなんだ」等々だが、字を読めるようになった子どもがふえてきて、どの程度消化しているかは問題だが、シリーズものを次々読んでいく子ども、まだ読んだことのない本をさがしては、読んでいく子ども、前回は、もう「次はこの本」と決めていく子どももいる。

絵本の読み方には、絵の多いものから、やや厚い字の多いものを夢中になって読む子ども、字を拾うことを楽しんでいる子ども、絵を楽しんでいる子ども、自分の手にしているものより他の子どもの持つ本を横から見ている子どももいる。あまり集中しない子どもには、保育者が読んで聞かせるようにして……というよ



ひとりで読んだり、友だちと読んだり

うに、回を重ねていくうち、だいぶ落ちついて絵本を見るようになってきて、図書室に行く日を楽しみに待つようになり、保育室の絵本も、だいぶ手にするようになった。この頃から、母親が本を借りていく時に、読みたい絵本を注文したり、いっしょに図書室に入って自分で選ぶ光景も見受けられた。

三学期に入って、図書カードを利用してみた。本の後のページに入っている図書カードに保育者が名前を書き、子どもはカード入れにそのカードを入れてから本を読み、読み終わったらまたカードを戻して、本をしまうというやり方で、これは小学生になってからも自分で本を借りに来られるように指導したのである。

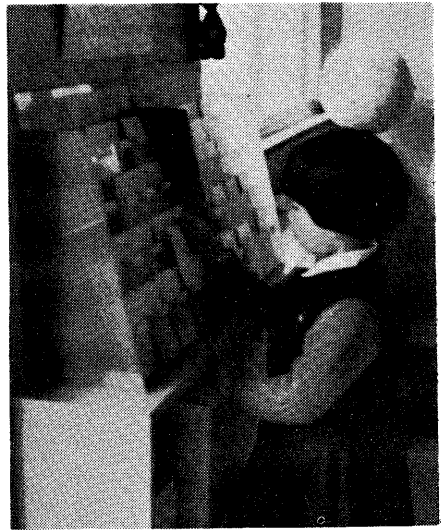
一年間の図書室の利用は地味な活動であるが、余程おもしろかったらしく、いっしょに本を作ったり、三月のおわかれ子ども会で「もりのとしゃかん」という題のげきあそびに発展した。また、降園の前、食事の後などに読んでいた本も、やや長い話、少しスリルのある話を聞くのが楽しみになってきた。絵を中心とした本から、物語の内容そのものを楽しむ、あるいはいろいろな自分なりに想像することを喜ぶ時期に入ってきたのであろう。そしてこれから先、本の楽しさがわかる時期に入るものと思われる。

一年間をふり返ってみて、絵本に対して関心のうすかった子どもで、子ども自身の発達といういろいろな絵本にふれる機会を持った

ということ、不十分ながらも絵本に興味をもつようになった子どもがふえたように思う。そして本の好きな子どももいっそう読むようになった。体験談にとどまるかもしれないが、絵本を使用した指導も他の教材同様、毎日の積み重ねの効果が大きいように思われる。

絵本は、子どもの情操を高め、いろいろの経験がまだ浅い子どもの想像力を増すのに役立つ。また、言語の発達面からも大切な教材である。しかも、子どもが自分で好きな絵本を自由に見ることができる。それだけに絵本の選択には配慮すべき点が多い。話の展開が明瞭でわかりやすいこと、子どもにわかることばで簡潔な文章、絵、内容に夢のあること、その他装丁などを検討して、年齢にあった内容の充実した良い本を揃えることが大切である。なお、絵本の好みの傾向、読書力は個人差も大きいので、できれば絵本の種類、内容に幅を持たせた方が良いと思う。絵本を保育者も子どもといっしょに聞くふんい気を作る、どの子どもも絵本を見る時間を設けるようにすることも、かなり絵本に興味を持つのではないかと思われる。

なお幼稚園で扱うのであるから、学校のいわゆる読書指導というより遊びの中で絵本とふれあうことの楽しさを知り、子ども自身が自分の活動として生活の中にとり入れて、感受性豊かな想像



自分の読む本のカードをカード入れにしまう

力のある本の好きな子どもになってほしいと考えるのである。

最後に子どもたちの好きな本をあげてみる。

たろうのおでかけ、もぐらとずぼん、かわ、ゆうちゃんのミキサー車、てつたくんのじどうしゃ、ちびくろさんぼ、ひとまねこぎる、ひとまねこぎるびょういんへいく、きんいろのしか、だいくとおにろく、ビカくんめをまわす、おそばのくきはなぜあかい、どろんこハリー、ちいさいおうち、ろけつとこぎる、きかんしゃやえもん、ゆきのひ、なぜなぜ文庫、こども百科、えほん百科、かがくのとも。

(泉幼稚園)